

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 3 月 21 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25670963

研究課題名(和文)障害をもつ幼児の養育者のコ・ペアレンティングに着目した育児支援に関する研究

研究課題名(英文)Coparenting quality in caregivers of children with chronic condition

研究代表者

佐藤 奈保 (SATO, Naho)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：10291577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：障害をもつ幼児の養育者のコ・ペアレンティングの様相に着目した育児支援を検討するため、この文脈におけるコ・ペアレンティング研究の文献検討、実際に養育する両親、育児支援に関わる専門職に対する調査を行った。

この文脈における既存の研究は殆どが量的検討で、様相の記述があるのは1編のみだったため、この1編の二次分析による知見と、健康な子どもへのコ・ペアレンティング研究の知見(子育てに関する同意、仕事の分担、サポートタイプが阻害的か、共同での家族マネジメント)を採用した。一方、支援の構築では、疾患・障害の特徴が及ぼす養育者の生活マネジメントへの影響、養育者の役割重複・変更への柔軟さを含む必要性が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to explore coparenting quality of caregivers of children with disabilities. The research was conducted in two stages; 1) literature review regarding the coparenting quality in the context of nurturing children with disabilities, and 2) interviews to both parents of children with disabilities and professionals who care for children and family from the coparenting quality points of view. Most of studies in this context were quantitative, and only one qualitative study described the actual coparenting situations. Therefore, it seemed reasonable to examine these phenomena utilizing secondary analysis of qualitative study and the existing coparenting research components. In terms of constructing the care model, results of interviews suggested that the necessity to consider the impacts of characteristics of children's conditions on caregiver's living management, and caregivers' flexibility regarding role overlapping in their daily living.

研究分野：家族看護学、小児看護学、災害看護学

キーワード：coparenting 障害児 養育 母親 父親 両親 育児における協働

1. 研究開始当初の背景

コ・ペアレンティングは、「育児に関わる養育者同士(母親と父親など)が育児についてコミュニケーションを取り合い、様々な調整を図り、協力し団結して行う育児」とされている。北米においては当初、離婚した夫婦による育児への関わりという文脈での研究が進められていたが、昨今では婚姻関係にある夫婦をはじめ、多様な関係性にある養育者の育児にも適用されている。

研究代表者は、障がいをもつ幼児を育てる両親の関係に着目し、育児における協働感を促進する看護実践、研究を行ってきた。その中で、互いの育児を認め合い、両親が共に育児における協働感を高く評価しているケースにおいても、育児行動の内容に「意図的に相手の世話の仕方を無視する」、「意見が沿わない時は常に自分の意見を取り下げるようにする」などがみられることを体験した。このことから、両親間の育児における関係性の支援を考える際に、協働感などの認識レベルに加え、育児場面における養育者の相互作用のアセスメント、子ども/養育者/家族のアウトカムとの関連を勘案した看護支援が必要であり、コ・ペアレンティングの概念の適用が有効なのではないかと考えた。

障がいをもつ子どもの養育者のコ・ペアレンティングに関する研究は、国内外を含めて非常に少ない。また、育児は文化による影響を大きく受ける営みであることから、海外文献で記述されているコ・ペアレンティングの構造が日本における育児に適用できるかどうかは定かではない。そのため、本研究では、既存の健康な子どものコ・ペアレンティングに関する研究、障がいをもつ児を育てる子どもの家族に関する研究を基盤に、実際に障がいをもつ幼児を養育している者、ならびにこのような子どもと家族を支援している専門職の体験を知ることから、支援モデルの構築を目指す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、障がいをもつ幼児の養育者のコ・ペアレンティングの様相に着目した育児支援モデルを構築することであり、以下の段階により実施した。

1. 文献検討により、障がいをもつ子どもの養育者という文脈におけるコ・ペアレンティングの概念構造を検討する
2. 障がいをもつ幼児を養育する両親、ならびにこのような幼児の育児支援に関わる専門職へのインタビュー調査により、コ・ペアレンティングの様相に着目した育児支援について検討する。

3. 研究の方法

文献検討ならびにインタビュー調査

インタビュー調査においては、研究実施に先立ち、研究代表者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究成果

1-1. 障がいをもつ子どもの養育者のコ・ペアレンティングに関する文献検討

1) 研究方法

以下の手順により分析対象論文を抽出した。

検索データベース(MEDLINE、CINAHL、PsycInfo、医学中央雑誌、CiNii)により、検索語をchild with disability, coparenting or co-parenting, parenting alliance, couple relationships, marital relationships, parents of disable child; コ・ペアレンティング、共育て、協同(共同)育児、夫婦関係、検索期間を2001年~2013年として実施した。重複論文を確認したのち、抽出された論文の要旨を読み、本研究の目的とは関係しないものを除外した。

2) 結果

(1) 概要

検索により抽出された文献は、海外文献 12

編、国内論文2編であり、この中から入手可能な文献8編（海外6、国内2）を分析対象とした。量的検討6編、量的・質的の両方から検討しているもの1編、介入研究1編であった。入手できなかった文献は、英語以外の言語による論文と、未発表の学術論文であった。

なお、上記で除外された論文は、両親の関係と母親の就労状態を検討したもの、両親の障害受容の違いを述べたもの、障害をもつ子どもの養親になる文脈での育児に関するもの、障がいをもつ子どものきょうだいの育児に特化したもの、障がいをもつ子どもの問題行動と両親の夫婦関係の質を検討したものであった。

(2) 分析対象論文における障がいをもつ子どもの特徴

今回の分析対象論文における子どもの障がいは、知的障害(intellectual disability)、発達障害(developmental disability)、身体・運動障害を含むものが5編、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder)および広汎性発達障害であるものが3編であった。身体・運動障害には、脳性麻痺、二分脊椎、脳形成不全などであり、国内文献には重症心身障害児も含まれた。子どもの年齢は幼児期のみが6編、学童期以上も含むものが2編であった。

(3) 障がいをもつ子どもの養育者のコ・ペアレンティング

今回抽出された論文の半数以上は量的研究であり、marital quality または coparenting quality と両親の育児ストレスや well-being との関連を検討するものであった。それら全てにおいて、marital quality または coparenting quality の向上が育児ストレスを低減し、両親の well-being につながるという結果が得られていた。自閉症スペ

クトラムの子どもの両親への介入研究では、Parenting Couple Resources として、夫婦間のコミュニケーションスキルが高いこと、特にコンフリクトマネジメントスキルが、夫婦/両親関係の満足度を高めストレスを低減することを述べており、ここに介入することの重要性を示している。一方で、今回検索された文献においては、実際に両親がどのような coparenting 行動をとっているのか、それにより障がいをもつ子どもや家族全体にどのようなアウトカムが期待できるのかについて言及されているものは見当たらなかった。質的分析を行っている1編は研究代表者による研究であり、両親の育児における協働感に関するものであった。本研究を進めるにあたり、この1編の質的データの二次分析を行うことが必要と考えたため、次の「1-2. 障害をもつ子どもを育てる父親と母親 - 育児における両親の関係に着目した支援 - 」を実施することとした。

1-2. 障害をもつ子どもを育てる父親と母親：育児における両親の関係に着目した支援（日本発達心理学会関連団体企画シンポジウムにて発表，日本発達心理学会第26回大会，2015年3月，東京大学）

障害をもつ子どもの養育では、障害の種類や程度、医療的ケアの有無はもちろん、障害受容や世話の複雑さ、子どもの問題行動への対応など、両親の関係をより複雑にする要素が存在する。このような状況の中で子育て、子どものニーズへの対応をどのように家族の日常生活の中に取り込むか、両親がどのようにこれを共有し調整するのは、現実には母親にまかされている場合が多い。

子どもの障害や疾患が夫婦/両親の关系到及ぼす影響について検討した研究はいくつか存在するが、これらの研究結果は様々で、かつ矛盾も見られる。Gaither (2000) はこの矛盾の原因として、疾患や障害の種類を

ひとつくりに検討したものでは、疾患や障がい
の重篤さ、ケアの特殊性など、夫婦関係に
大きく寄与する因子が覆い隠されている可
能性がある、疾患や障害の種類ごとに検討
したものでは、対象児の年齢や発達段階、家
族の発達段階による特徴が反映されていな
い、どのような事象を夫婦関係として測定
し評価しているかの説明が不足しており、多
様な測定用具が使われている、の3点を挙げ
ている。また Abidin (1992) は、いわゆる夫
婦関係の質は育児、子どもの発達との関連が
弱いことから、子育て研究において夫婦関係
の概念を扱う際には慎重であるべきと指摘
している。

研究代表者が行った、障害児を育てる母親、
父親を対象としたインタビュー調査におい
て、日常生活の中で直接的に子育てをする母
親と、間接的に育児に関わることの多い父親
では、子育てに関連する認識にずれが生じて
おり、このずれが両親の関心に影響している
ことが示唆された。また、この“子育てに関
連する認識”には、子どもの健康状態や発達
に関するとらえ方と共に、<両親が互いの育
児やサポートについてどのように認識・評価
しているか>、<互いが育児にどのように関わ
ることを期待しているか>、<家族の日常生活
の観点からは、互いにどのような役割と行動
を認識・期待しているか>が含まれることが
明らかとなった。以上より、これらの認識に
着目し、育児における相互協力を促進する支
援を行うことにより、両親の育児における協
働感を高め、両親の関係調整能力の向上に貢
献できると考える。

2-2. 障がいをもつ幼児を養育する母親、父 親のコ・ペアレンティングに関する調査

1) 研究方法

(1) 研究対象

障がいをもつ幼児を養育する母親、父親。
(実質的に育児に関わっている関係であれば、
婚姻関係の有無、子どもの生物学的親

であるかどうかは問わない)

(2) 研究の場

関東圏内にある重症心身障害児・肢体不
自由児施設の入院病棟、親子入園および外来

(3) データ収集方法

データは両親双方から得ることを目指す
が、困難な場合にはどちらか片方のみからと
する。

A. 半構造化面接

障がいをもつ幼児の養育の実際について、以
下の項目の認識と行動をインタビューガイ
ドに沿ってデータ収集した。

子どもの健康状態の観察や管理

子どもの日常生活の世話(医療的ケアを含
む)

子どもとの関わりや発達の促しに関する
内容(遊びなど)

家族外とのつながり(親戚、近隣、社会資
源の利用など)

家族としての生活の維持

自分/配偶者(パートナー)の子育てに関
する気持ちや考え

B. 質問紙調査

個人属性、就労の有無、家族構成、家族の
健康状態

子どもの疾患・障害、身体状態、発達の特
徴

子どもの日常生活上の世話(医療的ケアを
含む) 医療処方

利用している社会資源(通園、療育、訓練、
訪問看護等)

(4) 分析方法

Aのデータを逐語録とし、各ケースの母
親、父親ごとに Feinberg(2003)の「子育
てに関する同意」「仕事の分担」「サポー
ティブか阻害的か」「共同での家族マネジ
メント」について述べている部分を抜き出し、
意味内容とそれが起こっている文脈を損
なわないように簡潔な文章とする。

両親をペアとし、 の分析内容を

Feinberg(2003)の枠組みごとに整理する。

で整理したものを、<両親は互いの育児やサポートについてどのように認識・評価しているか>、<互いが育児にどのように関わることを期待しているか>、<家族の日常生活の観点からは、互いにどのような役割と行動を認識・期待しているか>の視点から検討し、それぞれのケースの特徴を記述する。

2) 結果の概要

(1) 対象の背景

対象は両親7組と母親2名であり、年齢は30代前半～50代前半、父親は全員が就業(自営業含む)しており、母親は専業主婦またはパート勤務であった。障がいをもつ児は1歳1か月～6歳7か月で、脳性麻痺、新生児仮死、染色体疾患などをもち、全員に発達の遅れがあった。また、全員が何らかの医療的ケアを必要としていた。きょうだいはいたのは2名で、いずれも障がいをもつ児より年長の健康児であった。

(2) 障がいをもつ幼児を養育する両親の コ・ペアレンティングの実際と特徴

<子育てに関する同意>では、医療的ケアの方法や手順、子どもの体調や症状に対する判断、治療処方の実施などの「子どもの身体管理に関する同意と相違」、子どもの出すサインへの気づきと意味づけ、子どもからの要求への対応、あやすことや遊びなどの「この子に合わせた親の気づきやかかわりに関する同意と相違」、通園施設や親の会、地域の人々との交流などの「家族外との交流に関する同意と相違」が見られた。<仕事の分担>では、父親は時間的な余裕がないために分担を意識しつつもできていない、休日等に子どもの世話をするが分担と言えるほどではないことを述べていた。母親は、父親には平日に家事や育児を分担してほしいと強くは望んでおらず、頼めば手伝ってくれることで満足と感じており、きょうだいがいる両親では、

父親がきょうだいの世話を担当することに満足と感じていた。一方、母親は自分しか世話ができない状況は問題であり、普段から障害のある児の世話を分担してもらうよう父親に意識的に働きかけることで、父親も安心して世話を引き受けられるよう準備する必要があると考えていた。

<サポータータイプか阻害的か>では、親としての有能さに関連した語りが多かった。障害児では世話の適切さが子どもの反応(身体状態の安定、よく眠れているなど)に現れることから、母親から父親に対して阻害的な関わりとなることが挙げられた。また、サインの読み取りが困難な児との関わりでは、ニードの把握の難しさから、特に父親の育児能力が知覚されにくい状況であった。相手を非難する、責める等のネガティブなコミュニケーションは見られなかったが、感謝やリスペクトを表現するという報告も少なかった。<共同での家族マネジメント>では、家族システム全体の動きが、障がいのある子どもの世話を中心に営まれており、子どもに関するマネジメントができていないことと家族のマネジメントができていない感覚が近接していた。これにより、夫婦/両親サブシステムとしての機能や境界ははっきりせず、両親と障害のある子どもとが一体化したサブシステムといった様相が見受けられた。

2-2. 障がいをもつ幼児の育児支援に関わる 専門職に対する調査

1) 研究方法

(1) 研究対象

障がいをもつ幼児とその家族を支援する専門職(看護職、保育職、心理・福祉職)

(2) 研究の場

2-1と同じ施設

(3) データ収集方法

面接調査

個人属性(職種、障がい児の育児支援の経験

年数)を確認した後、療育や在宅療養に関する相談において、両親の育児への関わり、両親の関係性が気になった事例または場面の想起を依頼し、具体的にどのような気がかりであったのか、それに対してどのように関わったのか、支援する際に両親の育児への関わりや関係性をどのような点からアセスメントしているか、についてインタビューする。

(4) 分析方法

逐語録作成の後、 はエピソードごとに文脈を損なわないように簡潔な文章にまとめる。 は同様に簡潔な文章にした後、2-1の結果と合わせて、支援方法の検討材料とする。

2) 結果の概要

対象は看護職2名、保育職1名と少なかった。対象が想起した事例や場面は、両親間の力関係が明白である、父親の育児に関するイメージや意識が薄い、母親に健康問題があり子育てに困難を抱える可能性がある、父親が子どもの状態についてあまり理解できていないと思われる、などであった。現実には両親に同時に関わられる場合は少なく、母親から情報を得て父親が来院する時を知り話ができるよう配慮などの工夫をしていた。両職種とも、子どもに必要な世話や予測される困難などを切り口に、両親のもつ在宅での育児のイメージ、特に父親が育児にどのように関わりたいかを注意深く聞き、それを支持する方向で関わっていた。両親の育児への関わりや関係性は、具体的な語りの内容(子どもの世話の実際や日常生活の様子)と、母親、父親の表情や口調などからアセスメントしており、関わる中では中立を保つこと、子どもの立場から意見を言うことを意識して関わっていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

佐藤奈保、障がいをもつ子どもを育てる父親と母親-育児における両親の関係に着目した支援-。日本発達心理学会第26回大会、東京大学、2015年3月20日~21日。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 奈保 (SATO, Naho)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：10291577

(2) 研究分担者

加藤 道代 (KATO, Michiyo)

東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：60312526

涌水 理恵 (WAKIMIZU, Rie)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：70510121